

椿説弓張月
拾遺

~13
3908
19



門 13
號 3908
13 19

一泓清潭硯池汪漾
新鳳堂
祥玉堂
梓

為朝外傳

弓月拾遺 張

一帙六冊

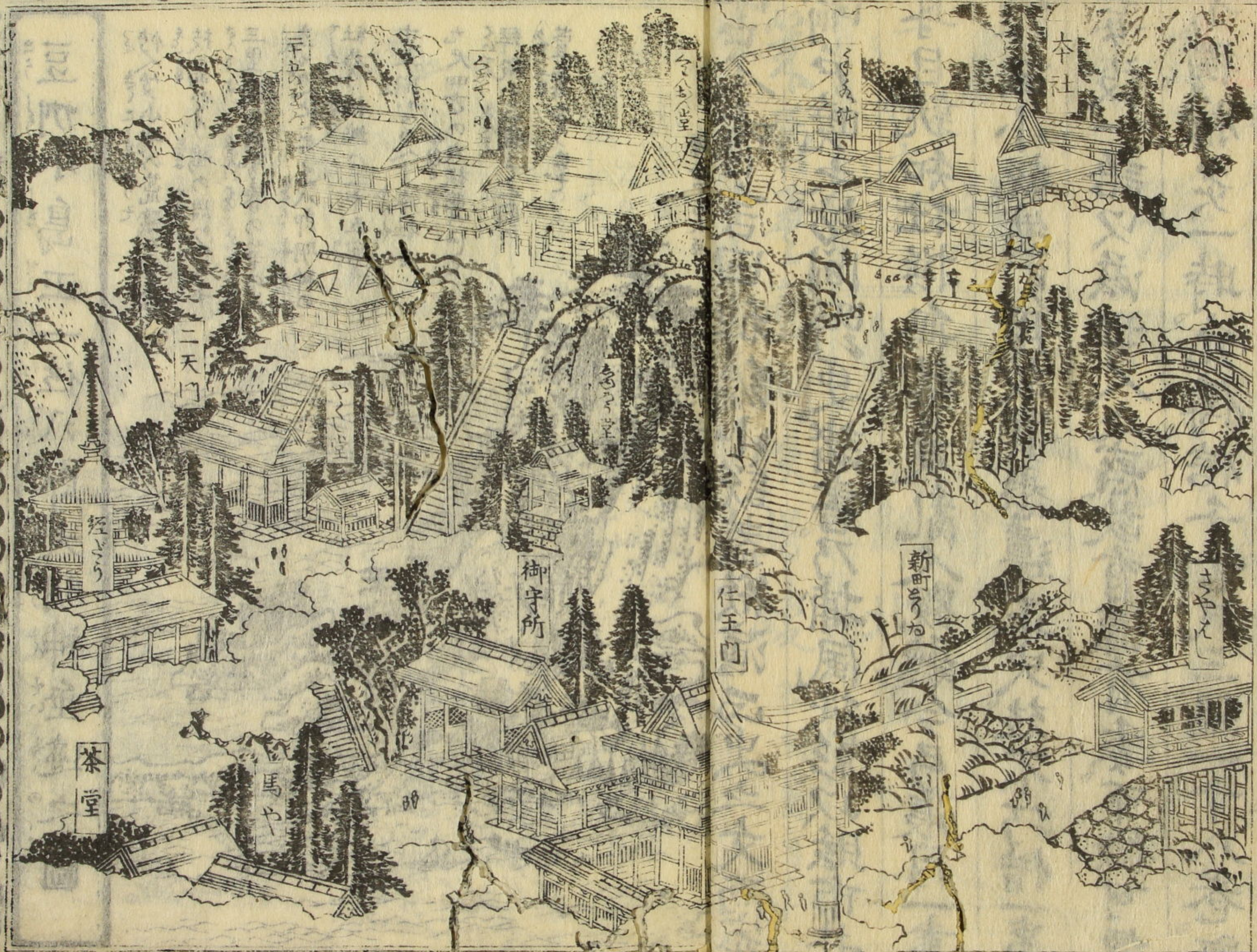


策層身 密網快 娼 峻
疏功鄭有

古人有言曰稗編小說蓋欲演正史之文而家
喻戶曉之坊間野史諸書乃捕風捉影以眩市井
耳目孰知杜撰無稽反亂人觀聽今弓月一書
雖云小說然引用故實悉遵正史茲不巧借一事
妄設一語以滋世人之惑故有源有委可徵可據
不獨膾炙一時允傳信千古凡三編一十八卷既
公諸海內近得拾遺十卷刊印始成全璧亦閱者
之快事也己巳仲夏書

觀 齋

春公遺卷之一



象頭山 讚岐國 金毘羅靈場之圖
ゾウダマツ 讃岐 こんひら らいぢやうのぶ

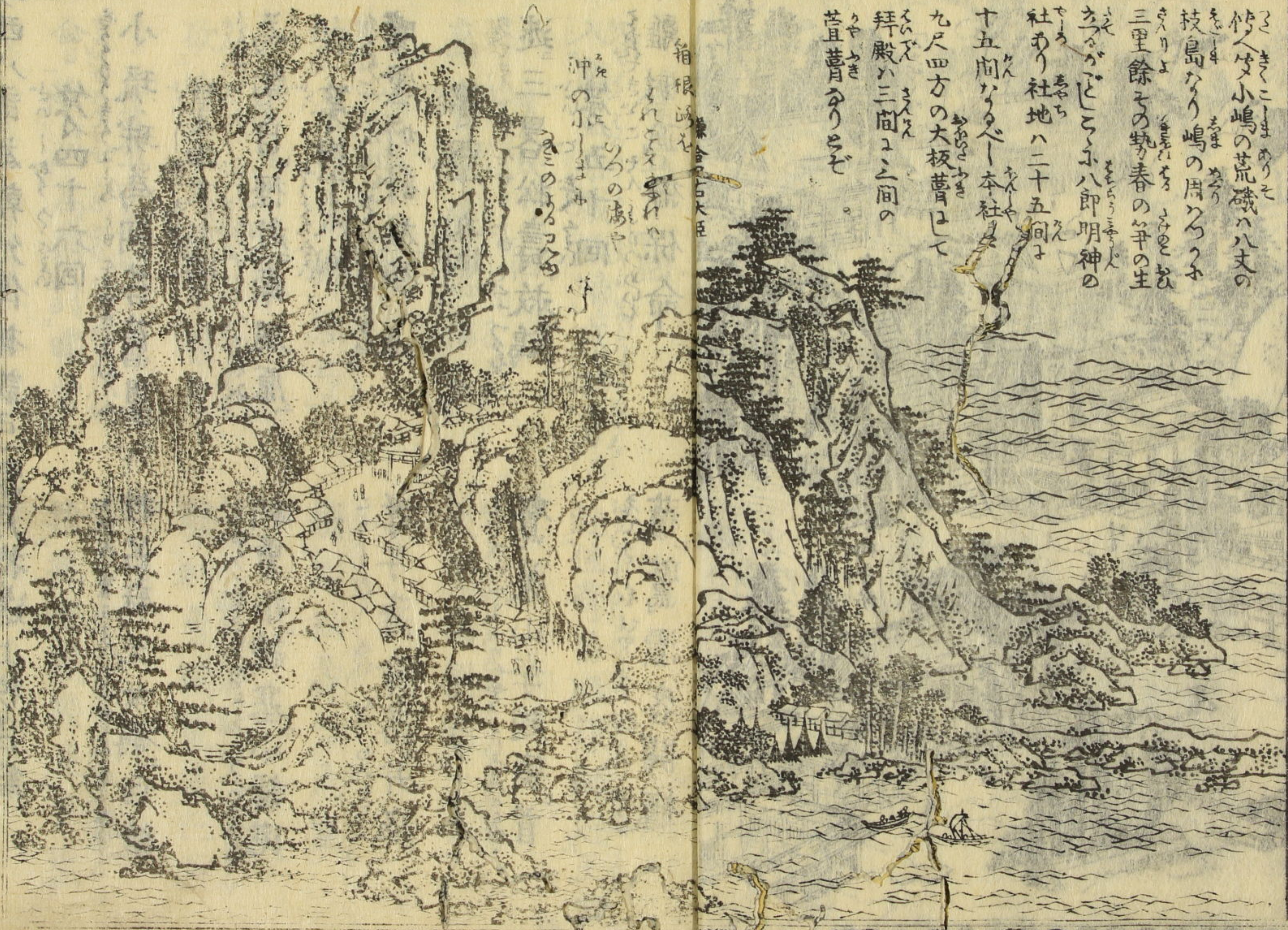
奉安殿
 長門合
 馬や
 茶堂

豆州小島正一位八郎大明神垂迹之圖

竹ノ小嶋の荒磯ハ八丈の
 枝島ナリ嶋の周リハ
 三里餘その勢春の争の生
 社あり社地ハ二十五間
 九尺四方の大板菅はて
 拜殿ハ三間ニ間の
 菅葺なりとぞ

箱根

沖の小島



長州合資卷之二

三

鎮西八郎為朝外傳椿説弓張月拾遺上帙目錄

第四十六回

小琉球為朝答舊恩

挂呂麻王女稱白縫

第四十七回

為朝自徑赴南風原

利勇拒諫塞小録港

第四十八回

矇雲奸計放傳

孝子薄命落井底

第四十九回

速三畧松壽救鶴

鷲巢山李趙喪首

第五十回

離樹孤孫保命

獲鷲漂客開櫃

第五十一回

入南風原城妖婦惑利勇

赴佳奇呂麻謀師迎王女

第五十二回

高樓矇雲認海氣

大里為朝娶

第五十三回

的利勇誇強弓

飛馬松壽告危窮

第五十四回

砍海棠為朝見矇雲

擊利勇鶴龜逐阿公

第五十五回

會按司為朝討矇雲

捨城塲賊將走首里

第五十六回

塞嶋袋 矇雲燒為朝

拂餘煙 王女素良人

頁外一條

金毘羅名跡并安井金毘羅事

通計十一回拾遺篇上帙五冊の目錄終

以下為朝王女巴麻嶋おのゝ赴き神せん仙せんの御み導みちと獲えて竟つひは姑こ巴は島しまの推おす

渡わたりてついでに舜しん天てん九く紀き平へい治ち亦また再また會あひあひあひあ再また會あひあひあ又また越こ来こ山さんの孤こ館かん也

陶たう松そう壽じゆ賤せん婦ふ千せん歳さいを破やぶるやぶるやぶ彼かの知ち堂だう詩し稿こうは賦ふる所ところの夫ふう婦ふ墓ぼ

の由よし来きりり母はは起おこはは又また天てん孫そん廟めう小せう鶴かく龜かめ阿あ公こうを替かへかへかへかの一條いちじょうは阿あ公こう

出身しんしん新しん垣げんが懐なつ劍けんの未み歴れき紀き平へい治ちが琉りう球きゆう國こくの地ち理りをよよく稽きむむるる縁えん

由よしを説せつ滯ちゆうと究きゆうて精せい細さいなる凡おほ初はつ編へんより二に編へん三さん編へんに至いたりりて終はつ也なり

審しんみみるるの多おほくくああるる至いたりりて分わ明めいなりなりかかくく為なるる朝あさ舜しん天てん丸まる

ゆゆび首しゅ里りを攻せうく矇めう雲うん以い誅しゆう戮りやくななままと夫おつ婦ふ父ふ子し相あ讓じやうすす

数かず箇かん年ねんが間ま琉りう球きゆうは王わうくくれれくくなりなりししるる為なるる朝あさ八はつ頭とう山さんは冬ふゆなりなりて

神しん仙せん小せう見けんえ崇たか徳とく院いんの迎むかははせせるる隨まるる眼まなこ前まへ登のぼ仙せんして日にっ本ぽんを往むか来きすす

た手てああるる王わう女にょ白はく雉しの顛てん末まつ神しん仙せんの道みち号ごう福ふく祿りやく壽じゆの論ろん勢せい仙せん鶴かくの出で

所しよ琉りう球きゆう開かい闢へく南なん樓ろうと稱せうして原げん来らい日にっ本ぽんの部ぶ内ないよりよりは舊きゆう説せつ舜しん天てん丸まる

その名なを尊そん教きやうと稱せうして文ぶん治ち三さん年ねん終つひる琉りう球きゆう王わうととなりなりるるああるる八はち町ちやう條じょう

以下いげ松しょう壽じゆ真ま鶴かく高かう間かん磯いそ鶴かく龜かめは生せい前ぜん身しん後ごのことことああれれは漏りゅう

ささと下げ帙しやく身しん五ごの卷まきおお至いたりり大だい團だん圓えんととなりなり一いつ部ぶの結むす局きやく作しやく者しやくの苦く心しん

ららに説せつも竭げつととべべるる全ぜん部ぶのここはは飛と行ぎやうをを圖ずるる者しやくかかららるるをを凡たて五ご編へん

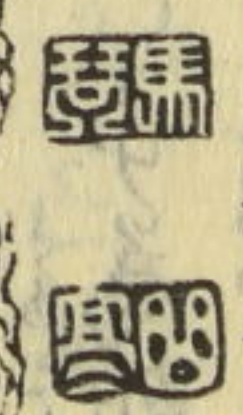
二に大だい卷まきを并ならべて高かう評へいをを入いれれるる

戊辰 冬

魁 蕾 陳 人 誌

靜業
 歡會門中蘆扇開美姬含米上行
 行盃全簪長史雍容甚鼓篋新
 從大學來
 布帽毛衣曳珮璫雙雙纖手繡
 鴛鴦女君曉入奉神殿舞也婆
 婆歌滿堂

右二首長洲尤侗悔菴琉球竹枝詞



鎮西八郎 椿設弓張月拾遺卷之一

東都 曲亭主人編次

第四十六回

小琉球小為朝舊恩み答ふ
 桂呂麻王女白縫と稱と

高倉院の安元二年丙申の冬十月九日ありのこことかよ。鎮西八郎
 為朝ハ琉球國の属嶋あり。小琉球の磯邊に。寧王女の必死ハ
 救ハ。矇雲が賊兵ハ射伏ふ。王女のいらと申これを入れてある。
 御曹司とほかられ声さるハ白縫ハ露むるも異なるねど。面
 親ハ又それある。いと不審げに在る人ハ王女ハ申て走りよる。
 簀の裾漏る為朝の。脛指ふとらるる玉を涙を押し拭ハ。縁故
 をあらわす。怪むるも怪むる。さてもいぬる八月の風難ハ。おん

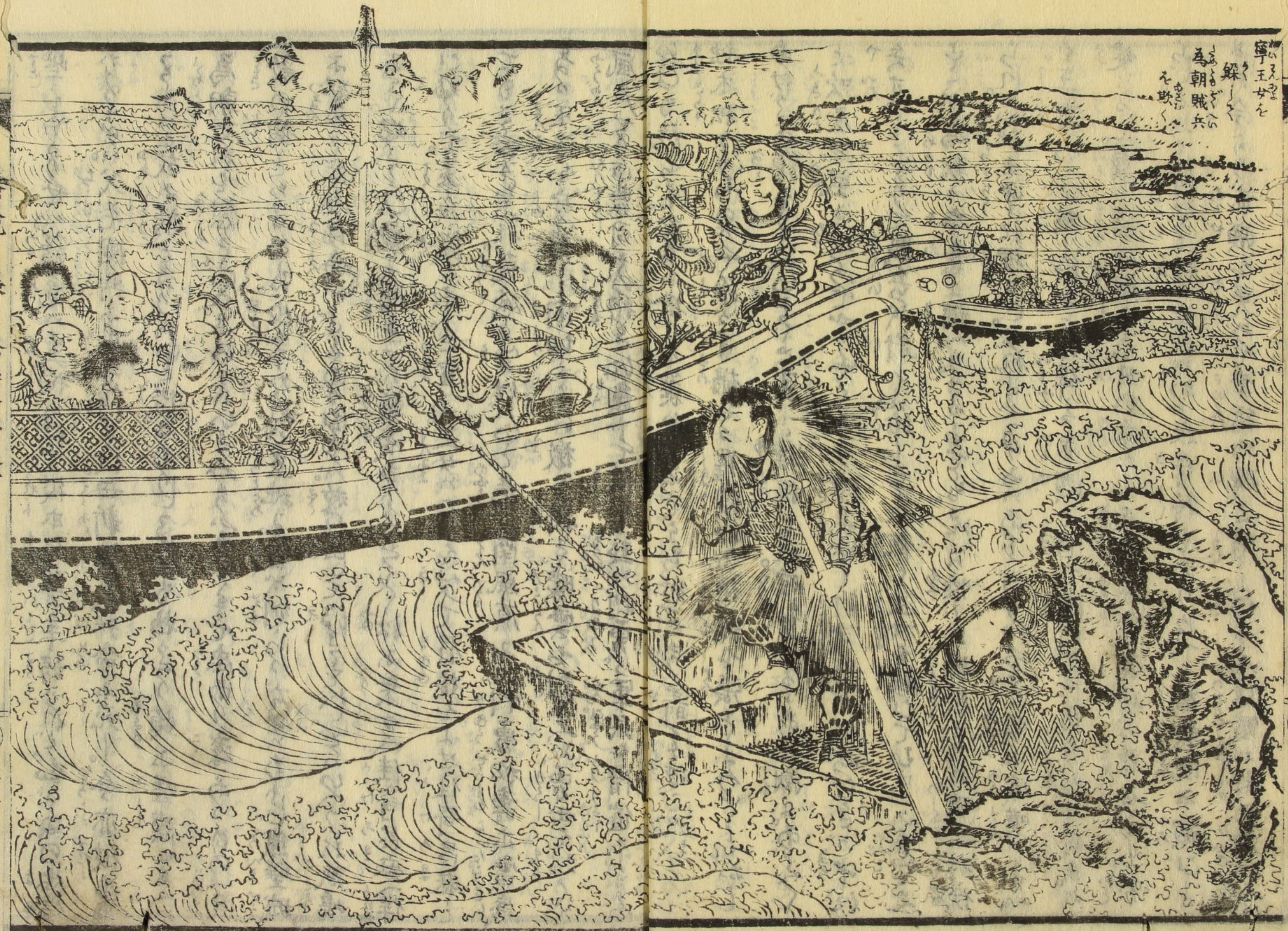
命のりりまを。身ハ洋海の底に沈ま。大魚の腹を肥せども。魂は
いよと滅ぶ。おつらうも荒磯のま。うはまの鳴ふ流ま。うりあ
ぞ教なれ他の國ハ良人とな。子をすの風も。あふ化なる磐蟬の
裳脱一人の躬を借つ。恙なれおん容止と。足なれ教。こまじわ
後もさうさ縁ば。らわぶくおほま。足も忘ま。あや。つが魂を
憑く。いける久壽二の年。阿蘇ふ在せ。院宜ふ。うて
放。千年の鶴。ひん。潜。この去へ推渡り。舊虬山の
麓。さうさ。彼鶴と大蛇の珠を交易。ひ。この國の世子
寧王女。て。國王尚寧暗愚。骨肉を遠離。忠臣と殺
そ。中婦君の某。大。利勇が奸悪。國人恨。離。こま
ま。りも。を。幻術。眩惑。龍宮城。
毛國鼎を殺。始場の間。廉夫人を討。王女。追捕人とま。
後。新垣真鶴。查。徒。この故。公。越。来。る。名。橋
の。あ。王女。既。お。と。世。影。身。憑。討。ま。れ
悪少年。以。盛。百折。千。誓。の。艱。苦。を。凌。こ。て。に。お。ん。才。ま。ら。し。け。り。
寔。お。王女。の。至。孝。少。て。公。の。女。いと。怜。利。一。且。世。子。ま。ま。ら。れ。と。り。とも。
中。婦。君。の。憎。忌。利。勇。矇。雲。ホ。が。流。ま。に。ふ。て。い。く。後。も。さ。く。察。れ
て。後。も。悪。少年。ホ。が。又。の。下。お。白。骨。と。な。る。り。あ。ら。べ。いと。痛。り。と。
お。侍。さ。ぎ。や。恥。し。ら。る。り。ま。ら。る。年。の。三。十。お。及。ぶ。も。今。お。男子。の。膺
あ。ら。ぬ。面。影。を。王。女。の。様。を。鑑。り。あ。ら。る。鑑。が。公。の。し。の。浦。あ。ら。い。く
後。麻。呂。の。慰。一。契。を。忘。ま。り。た。良。人。と。呼。び。て。め。あ。ら。も。に。こ。の。子。の
往。方。を。同。定。め。乱。ま。る。この。國。を。討。も。あ。ら。る。り。く。長。國。と。ま。

長國と

捨がえとひのり。倭入逆臣の時を忍ぶる。萬里を隔るれも異る。
 暎雲利勇の清盛よ。とて。からの癖者うら。とて。ち頼小憤殺し。
 ちや中山の為体を。つら。同ふ王女の至孝。廉夫人の薄命。毛國丹が
 孤忠。真鶴が心烈。新垣查國吉が。活。龍が。又。ま。でも。な。く。に。ま。さ。く。痛
 ち。ろ。ひ。お。ど。バ。又。素の。む。じ。寧王女の。惠。あ。り。て。頼。く。勝。を。獲。え。る。じ。ひ。
 今彼王女の。継母と。佞臣。若。ら。れ。九。死。を。出。く。一。生。だ。ら。し。難。し。と。は。る。が。救。の
 げ。ん。ま。信。も。の。く。後。も。な。れ。の。船。と。只。顧。ふ。や。が。て。ぞ。あ。ひ。つ。つ。つ。後。へ。
 ひ。う。ね。壯。士。も。不。知。案。内。の。身。ひ。と。ら。あ。く。か。う。く。し。く。進。む。が。う。く。な。れ。ば。
 お。の。用。も。も。ろ。は。ら。る。れ。佳。奇。呂。麻。人。を。お。て。ゆ。く。も。却。り。足。す。り。の。う。ら。ん。と。
 せん。か。せん。と。あ。ら。折。う。ら。この。境。方。の。こ。と。を。り。嶋。人。俄。頃。は。騒。が。ら。る。右。往。尤
 け。よ。奔。走。と。その。分。野。の。こ。ら。ほ。う。く。て。浮。長。を。び。び。さ。ぬ。と。何。の。め。ぞ。と
 ぶ。な。れ。が。長。が。顔。色。の。海。面。より。さ。蒼。く。肌。膚。栗。り。こ。く。ふ。な。り。て。あ。い
 け。物。の。ほ。い。り。り。と。あ。び。く。同。れ。て。胸。う。た。接。駁。あ。ら。い。ま。こ。あ。く。て。や。せ。を。る。
 昨夜月のあられ小乗して。この嶋人。小。我。細。を。ひ。ん。と。と。船。に。乗。小。琉。球
 の。嶋。北。へ。漕。よ。せ。んと。と。る。折。う。ら。五。六。艘。の。軍。船。あ。り。て。軍。兵。ホ。う。う。ら。相。流
 せん。と。い。ま。し。ふ。や。う。さ。も。つ。が。王。は。は。し。な。れ。の。宣。し。て。禍。歎。とい。ふ。猛。獸。を。ひ。れ
 出し。これ。を。乃。た。薨。逝。多。し。中。婦。君。も。さ。な。り。多。し。ひ。ね。こ。ら。う。う。う。し。ひ。ひ。なる。
 福。な。れ。い。う。せ。ん。只。痛。し。た。ハ。王。女。も。毛。按。司。か。子。ども。活。龜。を。お。く。つ。ら。小
 流。賊。なる。赤。瀬。の。碑。の。ほ。と。り。ふ。あ。く。潜。ひ。て。あ。い。し。ま。と。は。暎。雲。國。師。よ。く
 あり。て。夥。の。竹。汎。豆。之。小。禍。歎。を。牽。し。王。女。が。ら。し。ま。し。ま。と。と。て。は。く。し
 ます。後。小。こ。へ。も。舟。候。の。船。が。あ。り。陸。地。より。の。禍。歎。を。り。て。攻。ま。て。
 海上。あ。い。又。く。の。こ。ら。れ。備。あり。され。ハ。王。女。の。お。ん。傘。ハ。朝。の。あ。ま。の。燈。と。な。る。

あんふも限りあられていと痛あくるまごも。矇雲法王をゆしうぬめら
 者あれは彼福獸が忽地あつてそのののさうし妻をも子をも咬ひ殺
 そとを彼獸の火の中もあれ水の上もあれ行くとあふる人へ瞬く間
 うら流るといふ。佳奇呂麻より南なる嶋人あはかることともあふるや
 ちるらん。さてもうさては禍獸うなと吐くを。さあこの松よめれゆてたれ
 驚れ細をぶおろそぐ漕舟りて緑由や告る後ふ。とてあは矇雲利勇あ
 而しくいつざりしりのものゆらと。彼禍獸があまふいりゆせん鳥奇奴のこへ
 や脱と去るべた。度姑あへや赴ふべた。と罵る。家財を船に積入ると
 て。走り喘ぐあてゆ。と事審よ告しうべ。それ又小琉球の地利を訊考さて
 の王女の母も脱退し。庶莫汝ホ登るは速ふへうらひ。これ今みるう。彼処へ
 赴と。そのののいす。実るひらうら。王女と救ひ禍獸を踏殺して捨んと
 のひも流らと。養言お掛くる。養言とてらち被さる。前を被さる。只
 独木船よりあつて。誰か手搦る。羅漢松の櫓細を張る。さうくと。おし
 あけこの浪をまたい。いとすとす。揺揚られ揺あさる。あは潮よ。あはく
 と吹戻を。風よ逆めてやうやう。今漕きせ。丁渚の岸の志げさう中に
 や。矢よをこりて。賊兵に射と落し。とて輒く王女を救ひて。むししの恵と之
 とる。為朝か本意は禰へり。さるあても。凡し怪し。猛獸がこの碑お打伏
 られ。忽地土中に埋し。とれさる。あはあは。げりけ。と頻お感嘆。あは
 を王女のい。嬉しげ。とら。碑と赤瀬と唱て。國のあは。の遠祖天孫氏の
 建。この國を漢の礎あ。日の本なる天津逆鉾。鹿嶋の要石あ。お
 ら。と。あは神宝よ。傳る。あは。か。奇特も。あは。ね。し。禍獸既お滅び。と
 と。今より。赤瀬を。更めて。幸福の碑と。呼。け。ん。送。憾。の。殿。の。御。松。合。

春 宛 長 月 合 資 文 一



寧王女を
録
為朝賊兵
を欺く

百六十九 長月 合 舟 争

本 言 巳 月 舟 争 卷 之 一

七

勢少くもて本意なげり。又、あひくつゝ為朝へ王女を船に扶乗し、澳の
 かみ遙く指し、彼処より、驟雲が舟候の帆を出し、れは、遮り、雷人の必定く、ら
 散らさども、安んずる、れど、加勢の軍船、出まらば、毛を吹疵を求る。あり。その番
 の中こそ、あはし、究竟の隙、あなれ。そり入り、とて、ぬく、潜じ、番の上より、烟を
 うら掩ひ、漁獵せし、る、みじし、ら、為朝の、蓑の襟を、うら、あ、い、ま、を、か、さ、ぶ
 けく、櫓を、操り、佳奇、早麻を、投てい、そ、れ、り、日、の、ち、や、蒼海、の、浪を、湧りて、煙
 波、汨、没し、赤城、霞、起り、層、層、を、揚を、指出し、緑波、天、不、潰、て、珊瑚、島、と、や
 どり。され、後、世、小琉球、大、嶋、と、い、ふ、り、為朝、を、う、ら、び、亡、妻、と、の、い、ひ
 か、し、身、ひ、さ、る、十、は、蹟、を、伊、豆、の、大、嶋、に、比、て、その、名、を、負、せ、り、と、し、浩、然、お
 舟、候、の、快、船、五、六、艘、前、を、航、せ、り、と、追、蒐、来、て、為朝、の、船、を、遮、り、雷、軍、兵
 おの、く、鋒、を、横、へ、て、眼、を、睜、て、汝、の、船、を、何、処、へ、か、り、日、の、暮、り、と、行、て、密、中、の
 小、琉、球、の、こ、こ、り、り、と、す、り、り、と、怪、し、寧、王、女、を、落、し、ん、ぬ、り、か、じ、し、ら、い、
 ころ、よ、う、い、び、や、い、ぞ、船、中、と、展、檢、せ、ん、と、釣、索、を、打、つ、け、矢、庭、小、舟、に、乗、り、こ、す、れ
 ば、為朝、騒、ぎ、に、は、氣、を、な、さ、り、これ、は、佳奇、早麻、より、競、を、射、ん、と、せ、り、物、お
 わ、ら、れ、ば、い、と、づ、つ、に、ゆ、る、船、な、る、不、怪、し、ま、り、る、その、故、を、あ、ら、ぬ、雷、を、あ、ら、ぬ、底、い、と
 浅、と、独、木、船、な、れ、ば、人、を、憑、ま、り、た、護、り、も、あ、ら、ぬ、と、く、放、多、り、し、と、い、つ、せ、り、その、の、
 大、れ、多、る、番、の、中、小、人、が、か、く、さ、ば、隠、さ、ら、ん、や、くら、か、と、あ、い、て、を、や、え、せ、よ、と、
 異、口、同、音、よ、罵、り、と、為朝、呵、く、と、ら、ら、ま、い、た、漁、獵、の、の、ら、く、し、と、し、て、り、海
 上、と、そ、番、の、中、と、入、り、ま、り、ま、り、あ、れ、は、次、の、日、より、獲、は、し、と、て、か、う、く、思、ふ、さ、あ、ら、ぬ
 是、の、こ、も、免、れ、と、勸、解、と、せ、り、と、入、せ、と、い、ふ、こ、も、怪、し、れ、珠、は、汝、が、面、魂、佳奇
 早麻、の、漁、夫、と、い、ふ、と、中、う、と、あ、ら、ぬ、と、袖、先、を、ま、さ、り、早、雄、の、軍、兵、が、お、り、鉞
 を、ま、り、ま、り、く、番、の、真、中、へ、さ、と、刺、為朝、吐、嗟、と、ら、驚、く、顔、を、と、曉、り、と、し、

と忙しく奮まるとけ。多くぬる黒鯁魚を傷らうの情は。と吐き入り
 又一人刺入して船を踏外して水中へ真逆する水と流。衆皆これ驚き
 遠て助あんと。りる船の軍兵も板子と流し。鉤索と手探おし。とせ。かくせ
 よと主駈げ。その間おろし船よりかきれる。洶を反除。後方と見え。く
 漕退る。軍兵も辛じて水も溺る。兵士も引あげ。潮を吐し。じりて痛
 びのきく。逃去る。又て大驚。あまびに。逃入と。小まじげ。る
 軍兵押さめ。りやう。者奴り。番の中。王女と隠し。かくり。のら。刺さる
 と。そのまき。入る。刺し。ども驚き。又内も。苦痛の声のせ。り
 を。疑う。不足。は。な。船を。所堵。の。い。せん。う。く
 を。勅。と。禁。の。衆。皆。これ。あ。て。船を。舊の。処。へ。ね。う。終
 小為朝の海より昇る。亥中の月も。あ。が。不便。よう。ね。腕の。境。む。う。り。と
 どうして。三里。の。り。船を。ひ。く。し。遠。上。後方。と。え。う。の。一。の。敵。船。再。て。逃。り。ま
 せ。さ。う。く。の。ち。ち。わ。る。番。の上。の。船。を。う。ん。ま。り。王女。の。鋒。と。纏。ま。り。あ。り。傷。ま
 いら。と。同。ま。の。寧。王。女。の。出。し。い。な。流。痕。ま。け。り。腕。の。あ。り。と。傷。ら。れ。と。れ。と。
 声。と。う。へ。脱。と。が。じ。と。あ。ひ。け。り。と。答。ま。り。が。船。や。う。て。も。を。り。て。番。の中。より
 扶。出。し。懐。中。より。准。備。の。膏。サ。ホ。を。り。出。し。これ。を。残。し。お。打。と。叮。嚀。と。勅。り。と。
 宣。ふ。や。り。彼。賊。兵。ホ。が。諍。を。り。く。番。の。真。中。と。刺。り。し。と。れ。腕。と。あ。り。と。え。ん。船
 ち。く。その。船。上。乗。り。り。刃。け。け。く。浪。り。破。ら。せ。て。者。奴。ホ。が。屍。以。舟。登。り。積。り。累
 ん。と。あ。ひ。お。ん。身。苦。痛。の。声。あ。り。浅。痰。う。め。好。る。は。欺。く。ふ。と。じ。と。あ。ひ
 か。へ。と。氣。さ。も。え。せ。毒。蛇。の。腮。を。脱。し。り。さ。て。危。き。か。も。危。り。し。と。互。に。その
 恙。な。れ。を。終。び。ま。ん。く。船。を。走。り。て。結。且。佳。奇。呂。麻。の。穢。小。着。ま。り。嶋。あ。り
 と。あ。る。老。幼。男。女。後。邊。お。ま。出。り。為。朝。の。ゆ。り。あ。を。行。く。と。り。目。今。その。船。の。名

百代通記 皇代通記 卷之十一

十四

中三間むろり影おとして轆くつろりごと。と見えたるあるこの岸の男童子ホ
五七人蟹を拾ひてをり。いと高きふらとめを分けけが。

神人來兮 富藏水清 神人遊兮 白沙化米

とろりかつろ。拍子いとをけしげ難し。為朝これを分ちひて。そこの流

こも富藏河のりち。とおがと。ほり近くまより。やよ子も抱同んごり

南風原へちるあ。いづれの方。順路ある。をえはし。と宣へ。童子ホの河へ

えろりて。旅客南風原へゆんとあふ。浦添より首里を過り。大里。真和志

の間より。西南を指しゆく。これその順路あれど。矇雲法王世を清くその間切

毎小新関を居る。い割符をぬりの通さ。亦中城より。東の長濱とほひ

くゆく路あれど。この富藏河の船橋をわかれ。それにもかさひゆら。と

いふ。為朝やうららる。いづれもこの河を越さ。と申間影をあらはる。処

まて。すくくと走りゆれ。やと声うけて。因りて。越越南の者。むれ多人の童子

あ。舌を巻く。大さふ驚れ。と問あまり。落る橋をいと易くけふ。紙を

と。神人。人教とて。うらふ。頻々賞嘆あ。り。され。為朝の童子ホが。散動あ

く。声の後方。よ。は。ま。そ。て。只。顧。路。を。の。ぞ。だ。ま。の。子。那。城。を。め。う。ら。ち。と。え。ゆ。れ

ゆ。て。西。原。の。南。なる。佐。敷。の。津。波。古。村。宿。借。人。と。て。驛。門。は。入。り。多。ひ。つ

この地方。小川。良と。唱る。急流。あり。これを。さ。う。ひ。く。智。念。大。里。玉。城。う。り。南

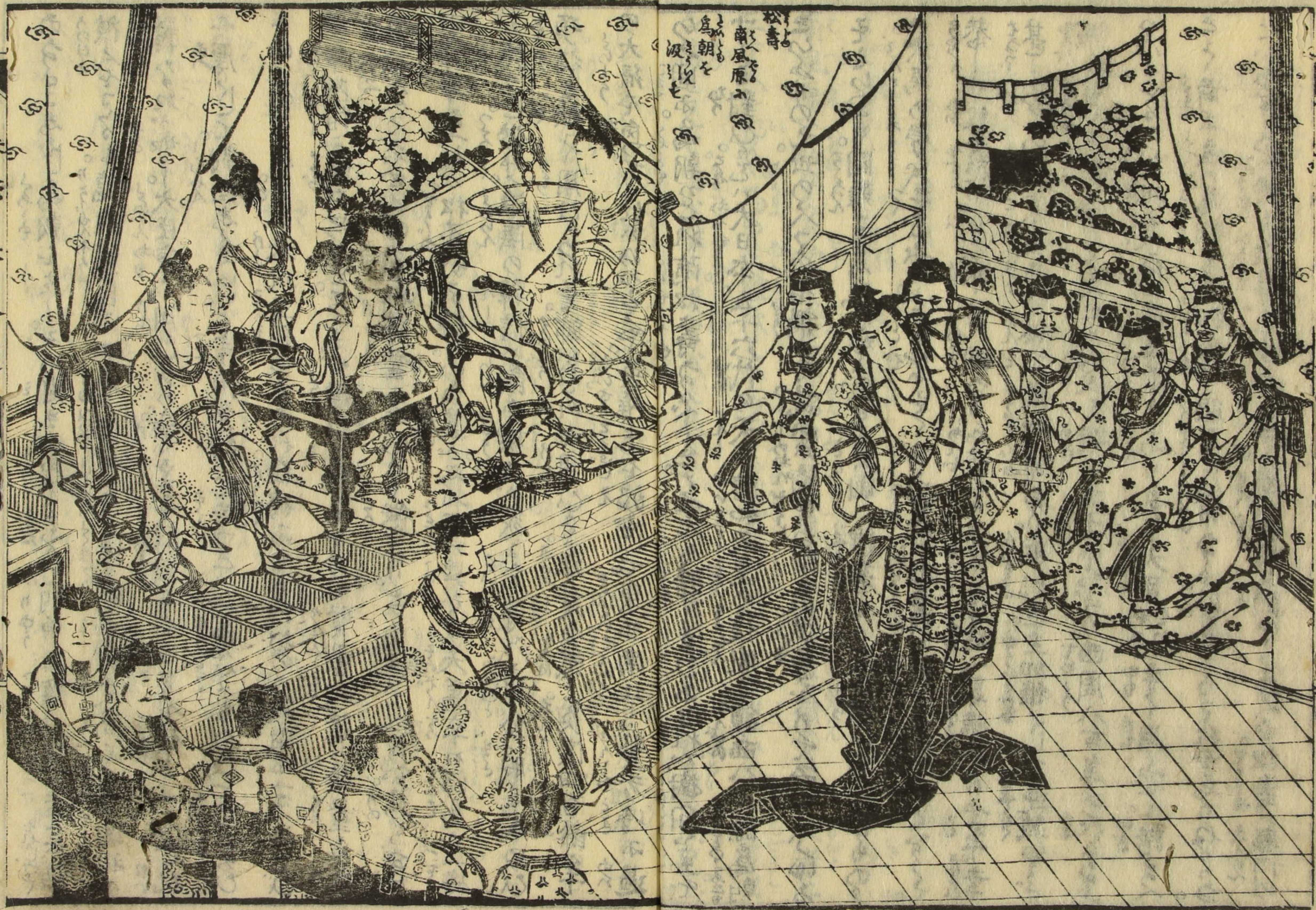
の。う。こ。中。山。山。南。十五。間。切。の。按。司。流。登。之。の。多。利。勇。は。従。つ。り。さ。る。ふ。よ。と。く

申。明。亭。ふ。招。武。牌。と。額。し。る。高。檄。を。掛。と。矇。雲。を。討。滅。と。ふ。と。き。勇。士。が

かん。招。え。た。れ。その。文。あ。

速追討賊首矇雲可奉還 世子於舊都事

右件矇雲者出沒不測之妖賊也 驅猛獸而絀



昔の長月合貴家

十一

松壽
南風原
鳥朝
汲

昔の長月合貴家

十一

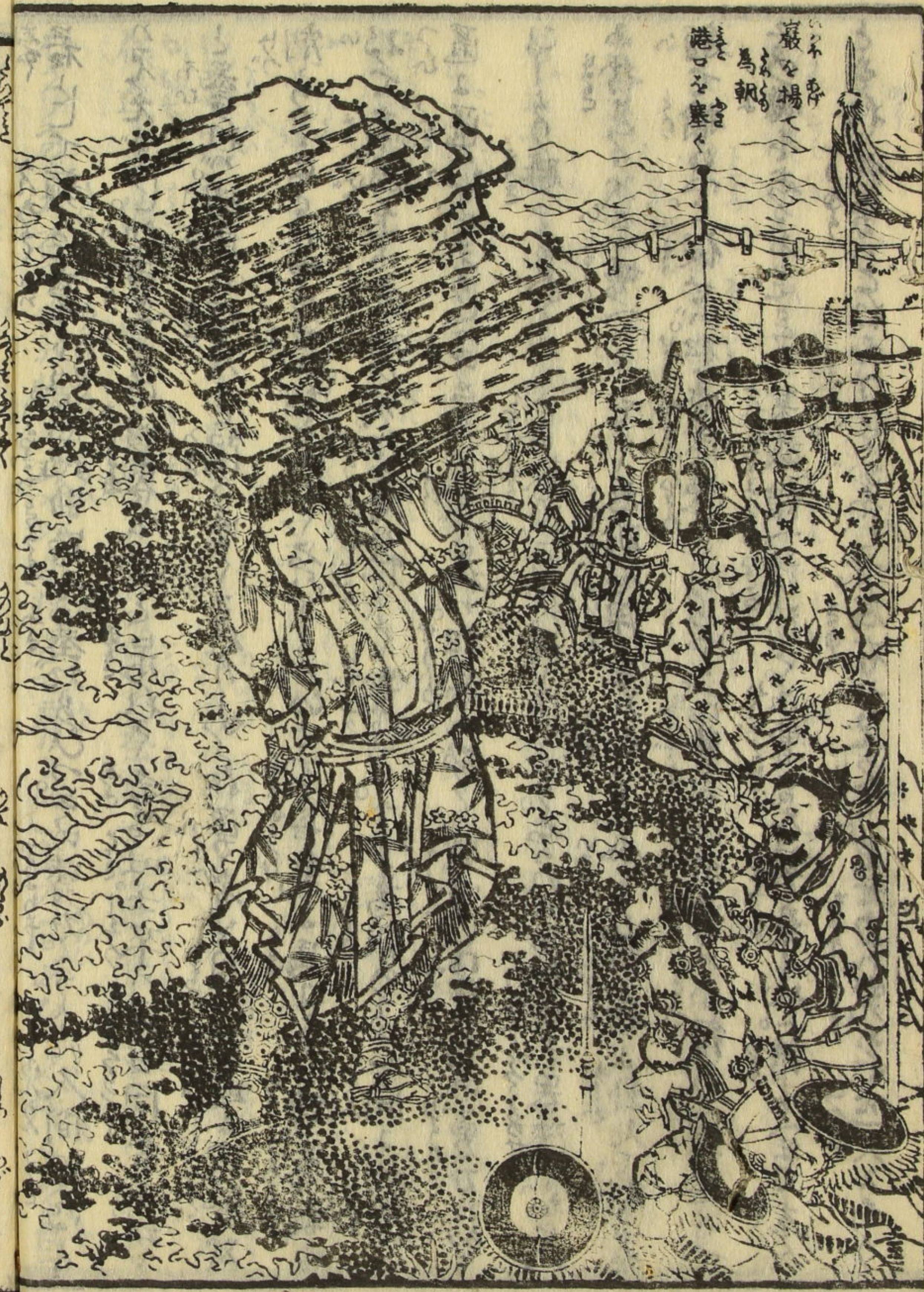
あつこま... 龍準鳳目... 大臣重く用ひ... 身不定の... 追ひ... 夫萬卒... 項羽... 大將を... 賢者時不遇

として先を山林... 虎翼を... 賢慮を... 追られ... 沈吟し... 錦の... 利勇も... 招れ... 謀畧... 機... 臨

不慮に戦ふ心勝攻むる。是將帥の方す。ふりの。いふ。敵の強
 弱を考へ。地の利を審み。せとして。且く。其議を。其能は
 と。さ。も。う。前。ら。て。む。ふ。下。敵。う。十六歳。は。て。九。州。を。并。吞。し。十九歳
 して。七。山。火。管。領。せ。り。され。ば。智。の。陸。賈。也。遇。勇。の。樊。噲。也。務。を。討。討
 乱。を。討。つ。草。小。風。を。ら。る。ご。く。民。を。括。國。を。治。る。み。水。の。ひ。さ。さ
 小。は。く。も。似。たり。この。外。は。能。も。ひ。さ。さ。と。臆。し。て。死。す。も。か。く。答。め。入。り
 利。勇。の。智。を。拍。く。大。笑。ひ。由。遠。か。る。も。智。勇。以。稱。して。自。濟。ら。ん。さ。ぞ
 や。父。母。の。國。を。去。て。露。命。と。こ。ふ。繁。人。と。さ。る。これ。決。く。実。言。と。せ。と。也
 その。説。と。ころ。万。一。も。湯。か。び。か。今。より。三。日。を。擧。り。て。課。さ。ぶ。え。り。さ。り。の
 第一。と。ころ。采。地。の。小。録。と。豊。城。の。山。間。濶。び。て。敵。を。禦。ぐ。小。伊。は。由。遠
 獲。処。に。到。り。他。の。扶。を。用。ひ。と。千。引。の。巖。石。と。り。て。これ。を。塞。め。身。二。の。近
 曾。舜。嶽。大。鷲。の。動。き。れ。ハ。里。小。求。食。く。人。民。を。残。害。せ。し。由。遠。只。却。と。す
 彼。山。入。り。て。件。の。惡。も。と。射。殺。し。身。三。の。曠。雲。が。賊。兵。川。良。の。流。よ。と。め。り
 用水。と。汲。と。め。り。由。邊。と。れ。を。ら。ち。田。て。その。首。級。を。取。り。て。三。金。條。の。課。役
 を。し。果。て。後。ま。く。用。る。に。し。り。此。の。一。箇。條。も。も。缺。く。と。れ。ハ。城。中。へ
 ぐ。ぐ。と。び。と。た。め。り。げ。か。く。既。亦。其。乃。朝。敵。也。して。領。事。は。う。け。ら。る。雨。の
 とも。九。庸。の。所。為。り。と。ころ。易。く。と。容。易。げ。不。疑。多。く。松。壽。の。傍。痛。く。お。お
 え。り。利。勇。に。對。ひ。由。曹。司。の。世。の。豪。傑。也。り。い。て。り。匹。夫。の。勇。と。り。て。これ。を。試
 とも。ふ。二。軍。の。乱。れ。も。疑。ひ。より。起。る。と。り。ハ。大。胆。心。を。傾。く。疑。を。速。く。取。用
 多。ん。ふ。こと。願。し。と。れ。と。凍。止。ハ。利。勇。の。武。を。左。り。右。り。ま。う。ち。掉。て。又。れ。今。その
 劉。臆。を。試。して。用。る。と。れ。ハ。士。卒。と。れ。を。蔑。して。その。軍。配。小。後。の。の。なる。人。樓
 司。何。の。ん。ん。と。ころ。あり。て。かく。い。ら。ん。や。世。の。常。也。は。能。め。る。鷹。も。春。を。放。さ。れ。ハ

その能をあらざりてこそいふに不意にさくら川に當下為朝のまわりの
 騎の校結あり。大丈夫の一言の駒馬も追がじ。某の此の固縁をは
 ぞ。いふ言の寓言あるべし。小録と申すは港へまうすや。御導は
 まひ孫と促し多へ。利勇も共小舟と起し。それより指揮せんとて松原を
 ぞめて城を渡りし。衣服と更り馬ふらら騎士卒四五十人あつて為朝の
 小録の港に到りし。為朝のひまをめぐりし。四方と見えり。あふ前
 蒼海渺くして右に錢貝山あり。左に奥山あり。曲路一徑を通過して両山
 風を建てるごとく。道幅僅小一丈あり。過るる。寔に此山間を塞ぐ。究竟
 要害なるべし。とひきりて。利勇の馬を引きて。床し。尻をうけ。准
 依違し。と催促をかくて。為朝の左右の袖を巻揚げて。浪打際より。向う
 かうりたる大石を。或は振り。或は抱きて。肩の山の間へ。入居り。自
 若として。顔を変へ。急地曲路を塞れ。多ひつ。その筋力うけた。人間正
 八ええざり。利勇のこの形容。直と呆れ。舌を吐。士卒の異口同音。中
 と。譽れ。利勇の指を。限りなく。それの。勇者と用ひ。遂に威勢
 削らる。このや。と世よ。おそく。と。不貞氣。馬より。跨。為朝を
 ねて。南風ふふ。支ぬれ。松壽の忙しく。出立。さ。為朝の。同。利勇の
 匿は。匿ひ。と。あり。も。と。お。松。威。曹司の。勇力。あ
 ひ。より。勝。多。と。敬。と。や。は。も。利勇の。器。狭。お。れ
 小。勝。の。心。嫌。の。ま。と。為朝。用。を。今。辨。嶽。赴。た。を
 射。捕。と。促。せ。松。壽。亦。凍。の。曹司の。武。勇。の。小。録。の。事。を。りて
 その。施。を。あ。某。旅。館。の。曹司。を。食。を。誘。多。と。と。立。人
 と。それ。利。勇。の。これ。を。父。と。か。不。して。左。右。を。足。之。を。力。の。究。めて。匹。夫。の。あり

春の長月 合巻 七二



不承
寝を揚て
馬朝
港に塞ぐ

大敵をくつろぐのハ必武界よりなり。彼人のこの日の糧を齎して。今城を出せよと
 下知する小松壽ハ凍死をありて。頓小嘆息。曹司辨嶽ハ赴れり。乃
 松壽が従者とりて。御導いとし。彼山路。羊腸にして。樹がら。漆く。熟る者
 も。踏ま。迷つ。つ。のり。且毒蛇猛獸も亦多う。う。自愛。ま。と。い。ハ。馬朝
 了。好意ハ。故。ふ。小。松。も。辨。嶽。ハ。さ。よ。り。の。巔。を。こ。る。か。れ。た。高。山
 び。れ。ハ。郷。導。ハ。さ。ら。及。ど。も。や。ま。ら。る。と。て。部。の。さ。に。出。く。ぬ。さ。び。牙
 かつ。ふ。の。で。さ。ら。獵。箭。を。肩。ひ。り。以。扶。ミ。利。勇。松。壽。ハ。辞。さ。り。て。川。良。の。上
 小。松。死。す。ハ。日。ハ。暮。て。初。更。の。比。よ。り。の。曙。雲。ハ。軍。兵。も。さ。ら。出。ま。り。と。水。火
 汲。め。り。し。と。て。流。き。添。り。て。通。霄。徘徊。あ。り。も。この。一。條。ハ。跡。た。た。無。言。の。り
 づ。れ。が。と。えて。ひ。ろ。り。の。人。影。も。え。え。と。終。り。の。夜。を。い。と。づ。ら。再。明。し。て。か。が。く。辨
 嶽。ふ。り。け。り。終。日。獵。ら。じ。し。る。小。松。鳥。ハ。似。る。る。も。と。さ。に。次。の。日。も。又。か

のこゝ岐捕らじし歩捕あけして。等二目小及べり。かゞてふゆらひ南風原へ
ゆりゆらし抑為朝異邦は漂流して身を塵芥に比し。その取辱を憂ふこと
誰がるぞや。あつとも就きを得て。賊兵一騎も奪ひにぞ。武名を他の國
ふらごさん。その朽をしと焦燥を樹同巖改まらひるく。敵をやめえ。撃つや
ると長たの夜をを目睡せと。ころけしと果しなれ。

嘯雲奸計鶴亀を放と

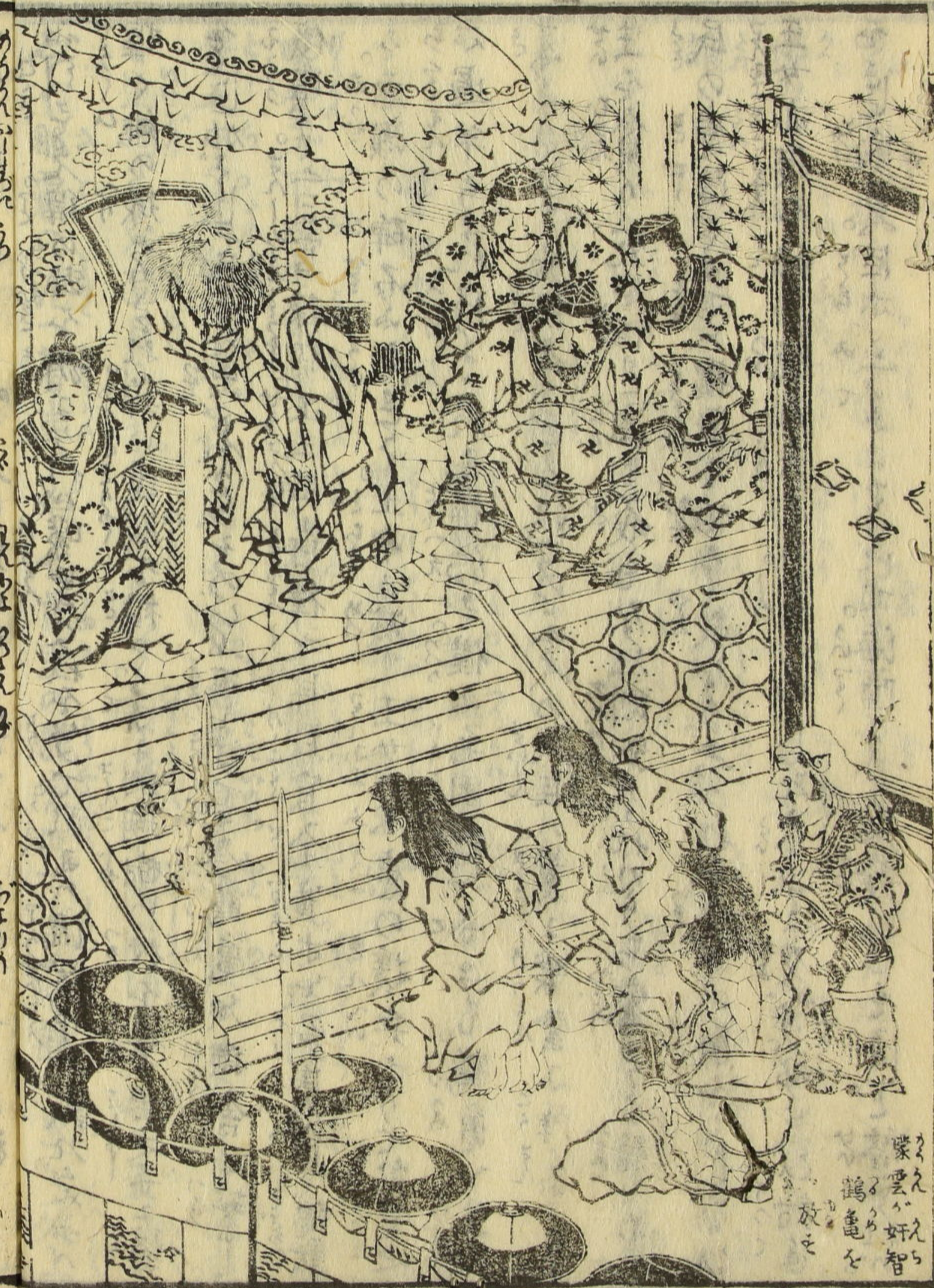
第四十八回

孝子薄命井底小港つ

嘯雲が下知を稟。寧王女と奪んとて。禍獸を牽て小琉球へ赴ゆる。筑
登之ホへ為朝の箭さるよか。過半命を買ひ。建るりのども。鶴亀
を生拘りて。面目にして。足もなぐ引退して。西間切より。松二無り。幸
ぐ。那覇の港へ著岸。やがて首里の龍宮城へ。ありて。鶴と亀と。筵上

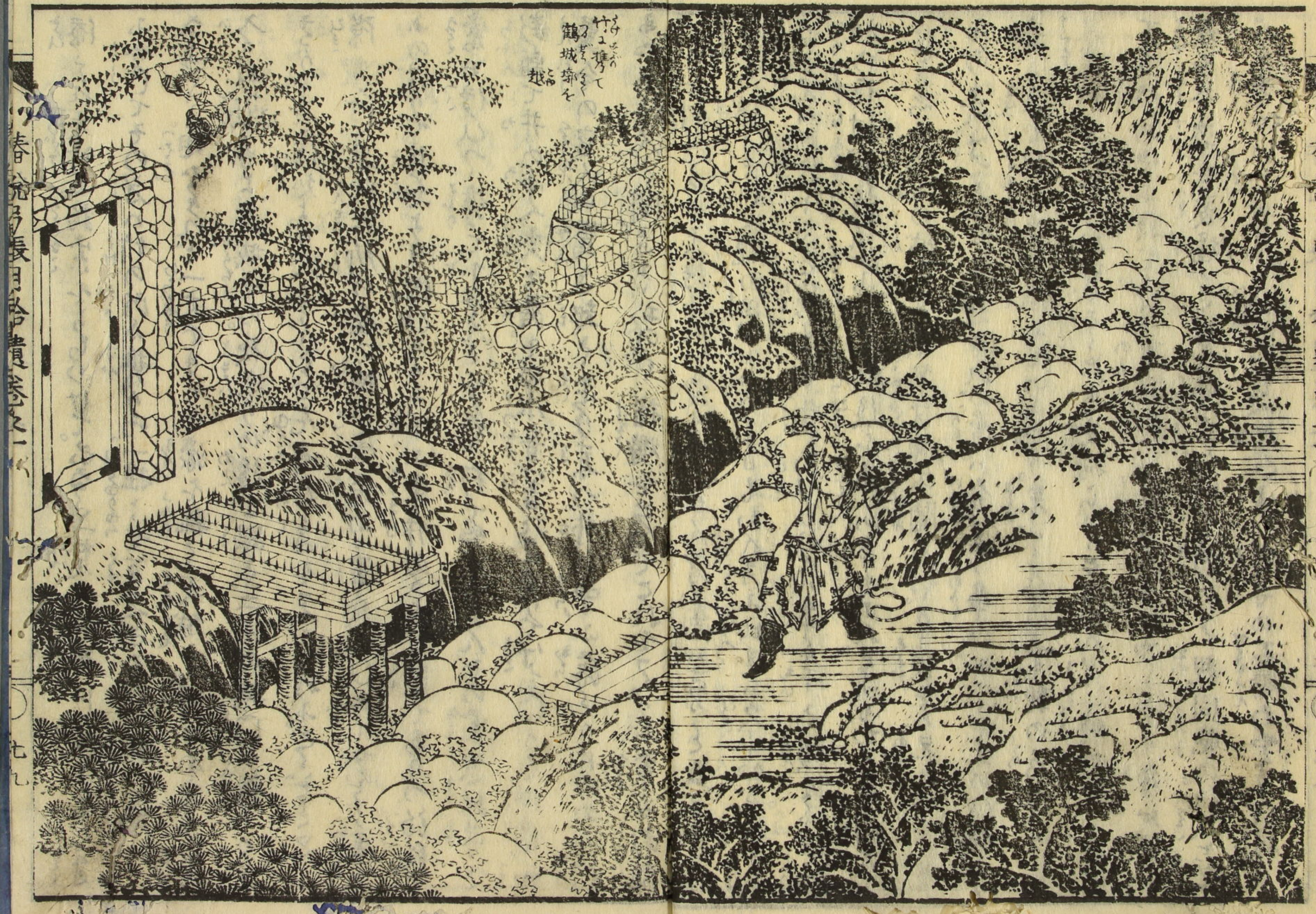
中江とえ緯の卦を訪ふれば。嘯雲とれを。夢て。流星中へ。載れ。文のハ
猩く緋の縁さる。錦の道服を被る。冊湖樹の杖を。會里之子。二。駁
を。し。か。び。して。ゆ。り。出。る。ら。そ。の。い。ふ。ふ。を。な。げ。て。鶴。亀。を。獄。舎。に。移。し
俄頃よ。司官棟孫正三品奇律之。耳目官全實ホを。召集合て。禍獸
を。赤。瀬。の。碑。石。に。打。し。と。土。中。に。滅。し。王。女。の。不。慮。の。援。兵。ありて。筑登之
亦過半ら。され。終よ。これを捕む。を。僅小毛國。馬が子。も。鶴。亀。を。生。拘
す。つ。の。し。よ。説。あ。ら。る。た。この二人の大臣の。曩。嘯雲。小。降。糸。く。
生を。貪り。死を。怕。且。忠も。義も。な。れ。剛。強。か。れ。ら。ち。驚。ま。く。面。を。ゆ。じ。
民の。帰。降。する。亦。禍。獸。を。怕。る。故。なり。あ。ら。れ。今。その。獸。を。し。な。ひ。
王女。亦。援。を。請。く。脱。去。し。去。り。莫。中。し。た。大。事。及。び。好。う。び。討。手
を。さ。し。向。ま。へ。匡。ホ。と。す。ま。ら。れ。て。海。陸。の。進。發。の。を。遂。と。啓。され。が。

嘯雲奸計鶴亀を放と



蒙雲の奸智
鶴龜を
放す

蒙雲凡を拍くとれを禁め王女ハ一旦脱々とも女流なり。くえいとれハ
懼々には足らば。禍歎ハつる術をりて出せり。のなきを戒めり。形なじ
よしや土中ハ滅されとも。そのまを引て。釋獄ハ於籠の腹中ハ蟄じ。
亦彼山の麓なる。樵夫ハ女兒の肺肝ハ斃じし。輒ハ利勇と亡す。
只忽とあがされ。王女を獲られ。壯士なり。彼りの。武勇古今ハ敵也。
こがこの千里眼をりて。それいも見え。利勇ハこれを用ひ。實は
とれ大なる。及ん。あられ。も。利勇と。その性奸雄なる。のこ。己ハ勝る。
ののを。己ハ。備へ。こ。十一八九ハ用へ。べ。よ。や。これを用る。も。又
別ハ。謀あり。と。今。富義河の。私指を。断。流。し。宜野。湾。浦。添。北。谷。ハ
関。氏。を。え。よ。し。と。下。知。され。ハ。棟。孫。奇。律。之。全。廣。ホ。その。遠。見。智。謀。
感。伏。ハ。俄。頃。ハ。羽。撥。を。花。て。その。地。ハ。按。司。ハ。昔。と。侍。く。准。佐。既。ハ。言。ひ



竹子
鶴城
越

春
長
月
谷
遺
跡
之
一

林
高
野
張
尾
推
進
卷
之
一

七
九

九
九

添くは大針の釣索をうらりつけて。あるは楚と手探はし索のじと
 小合してその刃の竹の尻小携りつの一揺りて反久こそれが釣いも
 まよくと廻り多れど一丈おきりの濠を輒く反越り埒のあつて花
 入りぬ折れもよえ城中の夜巡りの後、跟く二之の城門を輒くこえ
 まり。さて何処より入らんとして左邊右邊をええおふ。さうと
 隙もこじ只典膳所の屋の棟小唐突ある事おひ出し中を屋上
 おのぼりて其心より潜び入り下小車井あるはし隙てあつて釣籠の
 索と付ひつ携て下えんとされ。朽てやあり久。その索忽地井と
 彫離て井の中へ火と落。その水音響れりりてけえ。うを典膳和
 羹令の官人お驚き起り走り来つ。井の中お落るりのあり何
 ぬやあんと聞きた。おの指燭をさつてこれをうらり小索を彫離
 て釣籠落る。さうさるゆきり盗賊の敵の間者軟鞭をりり突
 くえおやとて。動揺めくと大さうに落り下りび水中お波るれど。
 浮のるとれ井の側へ手とひけて沈まも刺してはあはしとありを。
 うらり母憚らと。忽地お声お發く。それ人の落るも川のびてさ
 とら。衆皆これをやて。おらび驚れ。さう盗人は疑ひは。只刺殺
 せと罵アら。寔は落が危れる。穴を破らり蟹のごと。輒お吻く
 鮎お似たり。嗚呼彼井蛙の見をりて。孰う水中お孝子あるとさうん
 三寸息絶し。萬事休と旅魂今夜誰が家。お落るとおわえて辰
 けり。

椿説弓張月拾遺卷之一

...

